

書評

柳澤和也著

『近代中国における農家経営と土地所有——1920～30年代華北・華中地域の構造と変動——』

御茶の水書房 2000年 x+255+xiv ページ

おだのりこ
小田則子

I

本書は中国における1920年代～30年代の農村問題を、農家経営、土地移動と農家規模の変動、伝統的な農村の社会慣行などの論点から論じており、近代中国について独自の考察と農村像を提示している。本書の内容の特色は、南満州鉄道株式会社の調査資料を主要な情報源としていること、また伝統的な社会慣行を重視した農業経済の議論を組み立てていることにある。「あとがき」のなかで著者は、神奈川大学の各国経済研究会で受けた研鑽に謝辞を述べており、経済学、地域研究、現代中国論などの研究者との交流が著者の研究のベースにあることがうかがわれる。なお本書は著者の博士論文に加筆修正をほどこしたものである。まずその構成をみてみよう。

まえがき

序章 問題の所在

第1章 商業的農業進展下の華北・華中農業

第2章 「華北農村慣行調査」と土地慣行

第3章 1920～30年代河北省棉作地帯における農家経営と土地所有——売買と相続による土地集散のメカニズム——

第4章 1920～30年代上海市および江蘇省における農家経営の実情——農家経営の安定性と地主資産の流動性——

終章 1920～30年代華北・華中地域における農家経営の実情と土地所有の動向

附論 日本における近代華北農村・農業研究の現在

あとがき

II

各章の概要は次のとおりである。

序章では、1920年代～30年代の農村問題に関する著者の理解が提示される。著者は先行研究を、「ひとつは、地主階層の土地集積と農民の窮乏化（『下降分解』論）であり、もうひとつは、地主階層の脆弱性と土地集散の恒常的反復（『小ブルジョワの発展』論および『過小農化』論）である」と整理する。前者の見解にたいしては、中国革命の必然性を導くために「政治的な配慮」から要請されたもので、資料上の根拠が明らかでない」と批判する。1978年以降の農業政策の転換も、前者の見方に再考を迫るものとしている。また後者の見解は、「農家が農業経営規模を縮小する局面」については労働集約化を指摘しているが、拡大局面の「論理的説得力」に欠け、「小規模化した農家がくり返し土地の集積をはかるメカニズム」まで解明していない、とその不十分さを述べる。著者はこれら2つの見解を、「多くの研究者たちの意識の裡に共有されてきた」ものであるとし、「二つの対立的現象に接点を与え」ることを本書の課題として提示している。

第1章は、華北・華中の自然条件と、1920年代～30年代における農業技術水準についての解説であり、第2章～第4章での考察の前提をなしている。著者は、20世紀初頭から1930年代において全国的に商業的農業が進展していた趨勢を確認し、華北・華中の農業がともに集約度の高い農法段階にあったことを述べる。そして、こうした商業的農業の趨勢と集約的農業のもとで、農家の「経営規模は徐々に縮小しはじめた」としている。

第2章～第4章は、満鉄の調査資料に基づく本書の考察の中心部分である。第2章では「華北農村慣行調査」（戦後、岩波書店から『中国農村慣行調査』として刊行）を素材として、農家の土地取得と喪失、農家の経営規模の変動にかかわる農村の慣行が考察

書 評

される。ここではまず、「華北農村慣行調査」の資料的価値を検討している。著者は、調査の立案と実施にいたる経緯、調査の方法、占領下における調査村の選定など従来議論されてきた資料批判にかかわる論点を概述した後、これを積極的に利用しようとする論者の主張を要約し、著者自身も『華北農村慣行調査』を積極的かつ批判的に利用する立場にたつことを述べている。次にこうした資料批判を前提として、「華北農村慣行調査」の各調査村の概況篇と土地売買篇の部分の検討から、土地売買と小作契約についての慣行が列挙される。すなわち、土地売買では必ず第三者（「中人」）が介在し「地契」（土地売買契約書）が作成された。同族の先買権が認められるが、1920年代から30年代には墓地を除いてこの慣行は崩壊し始めていた。小作契約の締結の際には第三者（「紹介人」）が介在した。小作契約は1年単位であるが、事実上は複数年にわたり継続した。著者はこれらの慣行によって、農村には「農家経営の存続ができるかぎり長期にわたって保証される仕組みができあがっていた」としている。

第3章は、華北における土地移動を扱い、「第二次冀東農村実態調査」、「農家経済調査」の報告に基づき、河北省豊潤県米廠村における農家経営と個別農家がおかれた社会的な事情が考察される。著者は「第二次冀東農村実態調査」の統計篇から導き出した「土地移動状況」記録のなかで、地主よりも中下層農家による土地購入が多く認められることを重視し、これに整合的な説明を与えるという観点から先行研究を整理する。その結果、経営地50~100畝、25~50畝の農家が増大傾向にあるという諸研究の接点を見出す。「中下層農家が土地の購入に充てた原資をどのように調達したのか」が明確でなく、『土地移動』を仲介した社会慣行の存在」にも注意が払われていない、と先行研究の不備を述べる。そして「中下層農家においても土地購入が可能であった背景」について、以下のように考察している。

単位面積あたりの土地生産性と単位労働力あたりの耕作面積の検討は、農業生産に従事する者の所得が経営規模の大小にかかわらずほぼ均等であることを示している。また農業労働力1人あたりの扶養家

族の員数についても、農家間の階層による格差は認められない。したがって「上層農と中下層農とも農業経営規模を拡大していく」ために土地購入資金を捻出することができた。土地売買にあたっては、「中人」の介在や同族の先買権などの慣行によって、取引は「社会的に強く規制され」「地価は比較的安定し、土地投機によって徒に高騰する性格のものではなかった」。このため潤沢な資金を持たない中下層の農家も土地購入の機会を持てた。各農家の家産相続の状況から所有地の増減を検討してみると、均分相続とともに相当数の「単頭相続」（息子1人だけに相続させる形態）がみられた。均分相続は農家の過度の土地集積に歯止めをかけ、「単頭相続」は農地の零細化を防止して、中下層農家は階層としてつねに一定の経済力を保ったので（「農家間経済力格差の是正」）、やはり土地購入が可能だった。こうした状況下では、具体的な土地移動は個別農家の「私的事由」に規定されるとして、著者は統計篇から農家の具体事例を再構成している。

第4章では、上海市と江蘇省の5県で実施された「華中農村実態調査」をとりあげ、この地域における農家規模の変動を、農村の慣行と不在地主の動向から考察している。著者はまず、長江下流域の土地移動を特色づけたものとして一田両主（ひとつの土地を上地〔田面〕と底地〔田底〕の上下二層に分ち、それぞれが異なる者によって所有される権利関係。田面は田底と同様に永続する物件的権利だった）の慣行に注目し、この慣行のもとにある農村に検討を加える。すなわち土地の売却、借金のための土地の質入れ（「典」）、小作地の借り入れと貸し出しなど、調査村での土地所有権と耕作権の移動の事例は限定されており、1930年代には不在地主の土地集積による地価騰貴も認められない。つまり土地所有権の大幅な移転はなく、「農家経営の安定性が広範囲の農家諸階層で保証されていた」。著者はこうした「安定性」が、田底と田面が重複し小作地の転借も発生する一田両主の慣行と、都市近郊の副業・出稼ぎ収入の機会に支えられたものであり、そうした条件下の農家は「社会的階梯を上昇していける」可能性を持ったとしている。次に当該地域の不在地主の動向

書評

が考察される。一田両主の慣行では「一筆の土地にたいして多数の権利者が並存することになり」、不在地主は「あくまで地権の一部を集積した」にすぎなかった。さらに著者は曹幸穂の研究を引用して、不在地主が土地投資から獲得する利潤率は商業・工業への投資と比較して有利でなかったことを述べる。この傍証として、バック (J.L.Buck) の統計と中国農民銀行の資料から、1920年代半ばを境として田賦が増大地価が下落すること、同時期に上海の銭荘（銀行業務を扱った中国在来の金融機関）への出資資本額が増加したことを指摘し、不在地主の投資が土地から都市金融部門に移動する趨勢にあった状況を跡づけている。

終章は本書の結論である。まず著者は、マイヤース (R.H.Myers) の研究から山東省における農家経営規模の統計を引用し、1930年代には「自作農化の進展と農業経営規模の零細化という現象」が進行しているが、この時期の華北・華中における農民の窮乏化を地主の土地集中と結びつけるべきではないと力説する。著者は1920年代から30年代の農村を次のように描き出す。農家は「ライフ・サイクルと農外収入の多寡に応じて」規模拡大と縮小をくり返し（「地権集散のメカニズム」）、その経営は「土地慣行や親族関係などの社会的な枠組み」によって保護されていたと。著者によれば、こうした仕組みのもとでは、土地の相続にあずかれない土地なし農民がつねに一定数放出され（「単頭相続」により土地を相続できない者をさす）、農村に滞留した彼らの存在がこの時期の農村問題の主要なイメージを形成してしまったという。

III

さて以下では、本書の資料と著者の議論について考えてみたい。

第1に本書は、日中戦争期の中国で満鉄の調査組織が実施した農村調査の記録を主要な資料としている。1920年代～30年代の農業経済と農村社会についての情報を提供する調査資料には、国民政府の諸機関や諸大学によって全国各地で実施された中国側の

調査によるものと、中国東北部（「満州国」）および華北・華中の占領地域において日本の調査組織がおこなった実態調査によるものがある。周知のように、前者、特に陳翰笙が指導したいくつかの農村経済調査の参加者のなかから中国農村経済研究会の論客が生まれ、中国農村派の見解が形成された。一方、後者のなかで総合性と科学性を備えるのは満鉄が関与した実態調査や農村慣行の調査であり、その資料的価値は高く評価されている。本書では、『中国農村派』的思考（173ページ）にたいする反対論を満鉄の資料から展開している。本書が依拠するいくつかの農村調査の報告は、すでに1970年代～90年代の研究のなかで幾度か使用されたものだが、著者は「第二次冀東農村実態調査」の統計篇から農家それぞれの土地移動状況を再構成するなど、従来は数値統計として利用されていた資料から個別農家の動向を探る作業を試みている。

満鉄の調査資料は日本の占領政策と結びついたものだったため、戦後、その利用には否定的な雰囲気が強かった。それらの資料が成立した経緯を批判的に検証したうえで積極的に利用しようとする動きは1980年代になってから始まる [内山 1990]。本書はそうした動向の延長線上に位置づけることができ、1980年代の検証作業の誠実な部分が受け継がれている（第2章第3節）。しかし1980年代の問題提起を発展的に継承するという点では、なお課題を残しているように思われる。著者は「追調査の結果や中国内外の関係資料と併せて検討するなどすれば、その資料価値は十分に期待できる」（46ページ）と述べているが、残念ながらそうした実際の資料利用のあり方はまだ提示されていない。たとえば奥村哲は、江蘇省農民銀行の報告によって満鉄の江蘇省無錫県の調査を相対化する試みをおこなっており [奥村 1993]、この作業は満鉄調査の経済資料部分を検証していく方法を提起したものと考えられる。日本側の資料の利用が問題提起の段階をすぎて定着しつつある今日、占領地域での調査という全般的な注意点からさらに踏み込んで、個別の資料内容におよぶ検証の方法を模索していく必要があるのではないだろうか。

第2に本書は、1920年代～30年代の農村問題を論

書 評

じたもので、独自の農村像と、伝統的な慣行や農村の社会条件を重視した農家規模の変動に関する仮説を提示している。著者が議論の起点とするのは「地主階層の土地集積と農民の窮乏化」(7ページ)という農村の認識であり、この理解は陳翰笙の「現代中国の土地問題」などを踏まえたものとみられる[中国農村経済研究会 1937]。本書の主張はこの見方にたいする反対論として展開されている。また著者は随所で中国共産党の歴史認識の影響を批判的に指摘しており、本書は1970年代以来の正統的革命史観を捉え直す潮流のなかに位置している。著者が従来の農村像にかえて提示するのは、「対流しやすい緩やかな構造」(137ページ)を持つ諸階層、中下層から上層へと一定の範囲でたえず上昇と下降をくり返す農家群(「農家間の経済力の均衡」8ページ)という農村のイメージである。著者は、伝統的な社会慣行のもとで、広汎な農家が農業収入あるいは農外収入によって社会的「上昇」の可能性を持つとともに、ライフ・サイクルと相続という社会条件によって農家の恒常的な規模変動がもたらされたとする仮説を展開している(186~188ページ)。こうした議論では、農村の土地移動、農家の土地取得や経営拡大、規模変動などが、経済的事項としてのみ処理されるのではなく、社会的な行為として把握されている。

たとえば第3章と第4章では、農家の規模拡大を可能にした農村の伝統的な慣行について次のような指摘がある。潤沢な資金を持たない中下層農家の土地取得が可能だった理由は、「中人」の介在と同族の土地先買の慣行が農村の土地移動を抑制し、投機的売買による地価の高騰を防いだからである(89ページ)と。また一田両主の慣行では、地主が田底を購入・売却しても田面は依然として小作農家に保持され、田面を持つ農家や小作地を転借する農家の経営は安定して社会的「上昇」が可能であり、地主の土地集積は田底に限られた(137ページ)。ここでは、「中人」の介在、同族の土地先買、一田両主の慣行が、中下層農家の土地取得を可能とした根拠として、あるいは小作農家や転借する農家の経営を安定させた基盤とされ、農家の規模拡大局面を考察する著者の議論のなかで重要な役割を果たしている。著者は

伝統的な慣行を、合理化された土地売買や近代的な土地所有権の確立を妨げる社会的な障害物とはみなしておらず、逆に中下層農家や小作農家の土地取得と経営拡大の可能性を保障するシステムとして積極的に評価している。またこうした議論では、農家の土地取得や経営拡大をもたらす要因が、労働生産性や土地生産性の優劣といった経済的で普遍性を持つ根拠から説明されるのではなく、伝統的慣行という中国固有のシステムのなかで解釈されている。著者の立場は、中国社会に内在する論理を重視するものと思われる。ただし、「中人」の介在と同族の土地先買の慣行は一般に、急激な土地移動を防いだり、農民の質入れ地の請戻し(「回贖」)や土地の買戻しを容易にして、生きざりぎりの農民を没落から護る安全装置と理解されている[石田 1986,15]。59ページの記述はこうした解釈を踏襲したものだが、89ページの理解ではむしろ積極的に農家の「上昇」側面を導く仕組みとされており、その解釈に振幅が見られる。またこれらの慣行を地価の安定と結びつけるには、傍証が必要だろう。一田両主の慣行のもとでの農家経営の安定と規模拡大についても、具体事例を重ねて慎重に判断することが望まれる(注1)。

さらに第3章と終章では、相続とライフ・サイクルという社会的な条件が農家規模の恒常的な拡大と縮小を招くことを強調し、対流的な農村の姿を提起している。すなわち、均分相続が農家の土地分散をもたらし、「単頭相続」は土地の零細化を防止した(89~91ページ)、また農家の経営規模は「ライフ・サイクルと農外収入の多寡に応じて」(187ページ)変動したと。ここでのライフ・サイクルへの注目は、農民家族の発達段階(出生、成熟、死亡)により農家の経済規模が周期的に変化するとしたチャーヤノフ(A. Tschajnow)の議論を踏まえていると見られる[チャーヤノフ 1957]。著者が想定するのは、時系列の変化に従って恒常的に規模変動をくり返す農家諸階層の姿であり、こうした農村像は単線的な発展論の理解とは異なっている。著者の関心は通時的な農村の変遷過程よりも、恒常的な農家の規模変動といった共時的な構造に向けられているかに見える。また、相続とライフ・サイクルによる農家規模の拡

書評

大と縮小の指摘は、先の伝統的慣行の議論とともに、農家の規模変動が生じる仕組みを、経済的な要因から説明するのではなく、社会的な根拠に求めている。これらの議論は、市場の競争からだけでは、近代における階層分解の直接的な契機を解釈しきれないのではないかという問いかけ〔奥村 1999〕につながるものだろう。

以上のように、本書が言及する範囲は、農村の土地移動、農家規模の変動さらには伝統的な社会慣行におよび、それらを総攬する著者の方法は、農業という営みを単なる経済行為に還元することなく、その主体となる農民の生活レベルから把握しようという志向を感じさせる。著者の実証的な考察の進展を期待したい。なお評者の誤読、理解のおよばなかった部分にはご寛恕を願う次第である。

(注1) 一田両主の慣行について著者は、田面の所持が農家経営の安定をもたらすことを強調し、地主の収租体制(収租局)も「農家経営を総体として揺るがすものには映らなかった」(156ページ)と述べている。陶煦の『租覈』は清末の蘇州で小作料が苛重だったことを示しているが、清末～民国時期の租棧簿冊(地主の小作地管理経営機構の台帳)の分析では、蘇州の小作料は額面で1畝あたり1石程度、実際の徴収額はその8～9割とされる〔夏井 1989〕。しかし、著者の考察にあるように1930年代の小作農家の経営地は零細だった(表4-2, 表4-4)。また比較的広い小作地では小作名義人と実際に耕作する者が重層し(転佃)、実際の耕作者は通常の小作料に上乗せした負担を負った〔村松 1970, 116-140〕。田面を又小作に出すと、田面を持つ者

は小作料の他に「蓋頭租」を地主に納めたという報告もある〔天野 1978, 513〕。農家の経営安定と規模拡大は、こうした内容を考慮して安易な推測は避けるべきだと思われる。

文献リスト

<日本語文献>

- 天野元之助 1978. 『中国農業経済論』第1巻 龍溪書舎.
石田浩 1986. 『中国農村社会経済構造の研究』晃洋書房.
内山雅生 1990. 『中国華北農村経済研究序説』金沢大学経済学部.
奥村哲 1993. 「日中戦争前後の華中農村調査をめぐって——江蘇省無錫県の場合——」『人文学報(歴史学)』(東京都立大学) (238).
—— 1999. 「民国期中国の農民層分解をめぐって」『人文学報(歴史学)』(東京都立大学) (296).
チャーヤノフ, A. 1957. 『小農経済の原理(増訂版)』(磯邊秀俊・杉野忠夫訳) 大明堂書店.
夏井春喜 1989. 「清末・民国時期の蘇州における納租状況——租棧簿冊の統計的分析——」『東洋史研究』48 (1).
村松祐次 1970. 『近代江南の租棧——中国地主制度の研究——』東京大学出版会.

<中国語文献>

- 中国農村経済研究会編 1937. 『中国土地問題と商業高利貸』上海 黎明書局.

(名古屋大学大学院文学研究科研究生)